



白瀬中尉



野村直吉船長「南極水彩画」

目次

- ・ 特別展「白瀬中尉の南極探検」準備レポート ————— 2・3
- ・ 神明遺跡の発掘調査 縄文後期の埋設物を発掘 ————— 4
- ・ 資料紹介 『改正竈築造解説書 甲』
あるいは宇都宮三郎「築竈論」とその周辺 ————— 5
- ・ ふるさとの神々 八柱神社の謎とロマン ————— 6
- ・ 献上塩鮎その後 ～一年たった塩鮎を食べてみる～ ————— 7
- ・ 青銅鏡製作奮闘記 ～企画展「古代のきらめき展」より～ ————— 7
- ・ 文化財シリーズ・資料館ニュース ————— 8



コウテイペンギン

「白瀬中尉の南極探検」 平成15年10月25日(土)~12月7日(日)

準備レポート

みなさんは白瀬のぶとていう名前を耳にしたことがあるでしょうか？ 明治時代の末に日本人で初めて南極を探検した人物です。陸軍中尉ちゆういであったため「白瀬中尉」と呼ぶことのほうが一般的です。この白瀬中尉は豊田市で最期を迎えました。現在その場所(神明町2丁目)には「白瀬中尉終焉の地」と刻まれた石碑が建てられています。また石碑の題字は、現在も続く南極観測事業の第1次隊長、永田武たけしの揮毫です。永田隊長も豊田と関係の深い人物でした。

本年度の特別展は、“明治の探検王”を取り上げ、様々な資料から白瀬中尉を知っていただきたいと思っています。また永田隊長の関連資料もあわせて紹介します。今回ここでは、特別展の準備・広告を兼ね、その生涯を概観したいと思います。



軍服姿の白瀬中尉

白瀬中尉は、文久元年(1861)6月13日、秋田県由利郡金浦村(現在の金浦町)浄蓮寺住職白瀬知道・マキエの長男として生まれました。幼名は一千代のちに知教ききょう。近所でも評判の腕白少年でした。探検家をめざしたのは11歳の時。寺子屋の佐々木節齋先生から「北極」の話聞いたのがきっかけでした。節齋先生は探検家の心構えを教えます。それは

- 一、酒を飲まない
- 一、たばこを吸わない
- 一、茶を飲まない
- 一、湯を飲まない
- 一、寒中でも火にあたらぬ

白瀬中尉は生涯この「五つの戒め」を実行しています。

生家の後継ぎとして僧侶への道を歩んでいましたが、「僧職になっては、探検ができない」と軍人をめざします。その際、轟と改名しています。

明治26年(1893) 白瀬中尉は将来の北極探検に備えて、まず千島列島の探検をめざします。郡司成忠海軍大尉の千島探検隊の一員となりました。過酷な越冬生活で多くの仲間が死んでいくなか、白瀬中尉は生き残ります。

明治38年(1905) 中尉ちゆういに任官されます。以後世間からは「白瀬中尉」と呼ばれることとなります。

明治42年(1909)9月8日、ショッキングなニュースが舞い込みました。アメリカの探検家ピアリーが北極点の踏破に成功したとの新聞記事でした。このことにより、白瀬中尉は探検目標を北極探検から南極探検へと転換します。この事件により、ノルウェーのアムンセンも、北極から南極へ探検の目標を変更することになります。そしてもう一人、イギリスのスコットも南極探検を計画していました。世界の3人の探検家が南極点一番乗り動き出したのです。

しかし、政府は援助金を全く支給してくれません。そこで国民に訴えて探検費を募ることにした白瀬中尉は、明治43年(1910)7月5日、東京神田の錦輝館で「南極探検計画発表演説会」を開きます。演説会は大盛況。後援会も発足し、会長には大隈重信。日本に南極ブームが巻き起こります。



開南丸

しかしまた問題にぶつかります。肝心の探検船が決まらないのです。ようやく200t足らずの小船を手

入れ、11月28日に東京を出港した時は、当初の予定から3か月以上も遅れていました。

明治44年(1911)2月21日、探検船「開南丸」は経由地のニュージーランド・ウェリントンを出港。南極へ向かいます。しかし南極ロス海コールマン島沖で氷海に前進を阻まれ、無念の退却を決めました。再起を図るためにオーストラリア・シドニーで南極の夏を待ちます。

11月19日、再び南極をめざしてシドニー出港。しかし、スコット、アムンセンに遅れをとったことは明白。探検の目的を南極点踏破から科学調査に変更します。明治45年(1912)1月16日、開南丸は南極ロス海ホエルベイ(鯨湾)に近づいていました。このときアムンセン隊の帰還を待つフラム号に遭っています。

1月20日、白瀬中尉ら5名の突進隊は、行けるところまで行こうと2台の犬橇ぞりで南極点に向けて出発しました。そして明治45年(1912)1月28日、白瀬中尉は南進を断念します。食糧の欠乏、人間も犬も疲れきっていました。天測を行い、その地点が南緯80度5分西経156度37分であることを確認し、日章旗を立てました。日章旗の下には基金を寄せた人々の芳名簿などを入れた、銅製の箱を埋めました。突進隊一同は占領式を行ない、視野に入る一帯を「大和雪原」と命名しました。

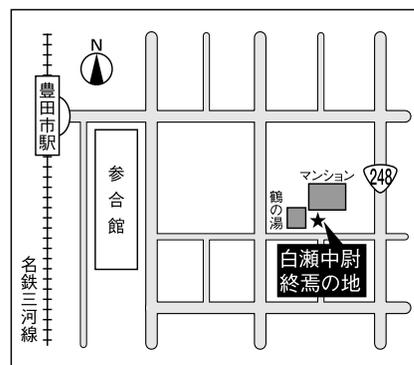
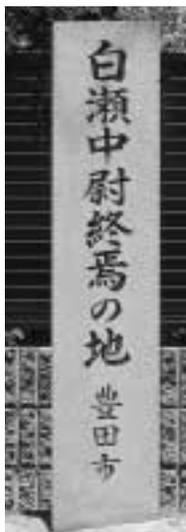


大和雪原占領式

6月20日、開南丸は東京に凱旋しました。全員無事の帰国でした。しかし、南極探検を終えた白瀬中尉に待っていたのは探検費用返済のための苦難に満ちた果てしない旅でした。自宅も借金返済のために売却して

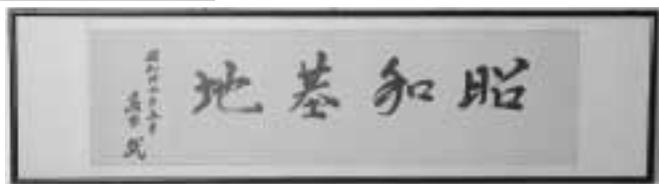
二女タケコとともに南極で撮影した映画をもって全国を講演の旅に出ます。

知人を頼り、転居を重ねる白瀬夫妻と二女タケコとその娘喜子。一家が豊田市(当時拳母町)に来たのは昭和21年(1946)8月19日のこと。終戦後、妻の実家に来ていたタケコの長男河口うしおが、近くの鈴木明治宅の鮮魚店「魚十」うおじゅう分店(神明町2丁目)に間借り先を見つけたのです。しかし、豊田に来てわずか17日目の9月4日、白瀬中尉は腸閉塞のために急死します(85歳)。葬儀は身内だけの寂しいものでした。



白瀬中尉終焉の地

白瀬中尉の壮挙から45年後の昭和32年(1957)、南極観測船「宗谷」で日本人は再び南極の地を踏みました。この挑戦を率いたのが第1～3次南極観測隊長、永田武です。父・与三郎は豊田市宮口町で生まれ、教育者となり、後に出版業界でも活躍した人物です。3次隊長として帰国した後の昭和34年(1956)5月22日、亡父の墓参りを兼ね豊田に来ました。崇化館中学校・豊田市民会館などで講演し、先祖の墓のある宮上町では地区住民の大歓迎を受けました。このとき、地元の小清水小学校へ寄贈した「昭和基地」の揮毫は、現在も同小学校の図書室に掲げられています。



永田隊長揮毫「昭和基地」

(成瀬憲作)

発掘調査速報

神明遺跡の発掘調査 縄文晩期の埋設甕を発掘

神明遺跡は豊田市南部、鷺鴨町の矢作川の氾濫原を望む台地南端にあり、先端部に三味線塚古墳が位置しています。弥生時代～古代の大規模な集落跡で、三味線塚古墳を中心とした一部が豊田市の史跡として指定されています。

これまでの調査

遺跡は昭和30年代から遺物が採集され、つとに良く知られていました。最初の調査は昭和41年に東名高速道路の建設に先立って行われ、58棟の竪穴住居を発見、西三河での本格的な集落跡の発掘調査となりました。

平成5～7年に市道拡幅工事に伴い、台地端部から内部に向かって調査がなされ、竪穴住居など42棟の建物跡が見つかりました。稀にみる広大な遺跡であることが明らかになりました。

つづいて平成9～11年には第二東名ジャンクション建設により台地先端部に近い、高速道路に接した3,000㎡と三味線塚古墳が調査されました。竪穴住居68棟、掘立建物49棟が検出され、三味線塚古墳の主体部が粘土槲であることが判明しました。調査後復元、整備されました。

今回の調査

調査は7月31日から8月22日までの、実質14日間でした。前回調査のA地区の北側に隣接する畑で、専用住宅の建設に先行する発掘で、100㎡を調査しました。遺跡全体にしめる位置としては台地先端から少し内部に入った西寄りに相当します。

調査の結果、従来の調査と同様に古墳時代の竪穴住居跡1棟、同ピット1基、古代の竪穴住居跡2棟、同溝跡2条、同柱穴1基と今回では新たに縄文時代晩期の埋設された甕が発見されました。以上のほか調査区南西隅の包含層より縄文時代の石棒が出土しました。調査は少面積の発掘にかかわらず多くの成果を得ることができました。3棟の竪穴住居跡はいずれも重なりあい、前回調査区につづく住居跡の密集区域であることをしめしています。

古代の住居跡 SB303は古墳時代の2棟を切込んで築かれ、長辺5、短辺4mの隅円長方形のプランで南北方向に長く、東辺に火所があったと思われ焼土が集中していました。柱穴はなく、不揃いな壁溝がみられ、火所の南寄りが大きくくぼんでいました。

埋設甕は調査区南東隅から発見されました。甕は口縁部を上に向け、ほぼ垂直に立てられた状態で埋められていました。甕のすぐ近くに円礫が2個置かれていましたが、どのように関わっていたのかはわかりません。甕は下底部を欠き、上部は割れて内部に倒れ込んで重なりあっていました。内部は黒色土が詰まっており、他に遺物は何も発見できませんでした。甕は口径5、60、高さ7、80cmのバケツのように口を大きく開いた形で、上下方向の条痕文が施されていました。下底部は埋設される前に故意に取り去られたものと考えられます。年代としては縄文時代晩期に属し、何に使われ、何の目的で埋められたのでしょうか。今後の土壌分析に期待がよせられます。



埋設された甕

神明遺跡を含めて豊田市南部では縄文時代の遺構、遺物はきわめて少なく、前回の調査で中期の竪穴住居跡1棟と少量の石鏃類、土器片などが発掘されている程度でした。今回の埋設甕と石棒の発見は神明遺跡の実態、市域南部の縄文時代研究に新たな資料を提供できました。

(松井孝宗)

『改正かまど竈ちくそうろん築造解説書 甲』 あるいは宇都宮三郎『築竈論』とその周辺

『改正かまど竈ちくそうろん築造解説書 甲』は、明治16年6月に神奈川県勸業課(調査者 乾 立夫)が発行した25頁(図表を含む)の冊子です。内容は、従来の竈かまどよりも熱効率に優れ、燃料を大幅に節約できる竈(改正竈)の築造方法を示したものです。

本文中では、まず旧来の竈の構造の欠陥と問題点を指摘し、その改良事項として ①火焰ノ行路ヲ延長スルコト ②炊口ト空気口トヲ区別シ及ピ火床ヲ設置スルコト ③右二口共二戸ヲ設ルコト ④煙突ヲ設ルコトの4点を挙げ、それぞれの事項について解説しています。そして竈の図面や付属物の寸法の比例表を添えて、築造方法の説明をしています。

なぜ神奈川県の資料をここで紹介するのか、疑問に思う人もいらっしゃるかもしれません。実はこの『改正竈築造解説書 甲』は、豊田市ゆかりの近代化学・技術の先駆者である宇都宮三郎^{※1}が著した『築竈論』と興味深いつながりを持っているのです。

『築竈論』は、明治16年6月に交詢雑誌119号から122号に掲載された三郎の論文を合本した64頁(図表を含む)の冊子です。内容は、表題のとおり竈(改良竈)の築造方法を解説したのですが、その改良竈の構造は『改正竈築造解説書 甲』に示されている改正竈と同じです。ただし、『築竈論』は物理学などの学理的な解説や数種類の竈の図表を掲載するなど、『改正竈築造解説書 甲』よりも詳細な記述となっています。

発表された時期と内容が同じ『築竈論』と『改正竈築造解説書 甲』の間には、どのような関係があるのでしょうか。『改正竈築造解説書 甲』の中に宇都宮三郎を示す語句は見つけることはできませんが、『築竈論』のなかで紹介されている竈改良の成果についての事例報告には、『改正竈築造解説書 甲』に掲載されている結果表と同じものが「神奈川県勸業課 乾 立夫君 送付」として紹介されています。ここに三郎の改良竈と神奈川県勸業課の改正竈との接点が見出されます。

『築竈論』に記載された県単位の改良竈の成果事例は、神奈川県の他に、山梨県・千葉県・愛知県・静岡県があり、いずれも各県の勸業課から報告されています。三郎の改良竈は、一般家庭用としてだけでなく、醬

油や日本酒の醸造など原料加工用として、作業効率の向上や経費節減などに威力を発揮しました。そのため、「勸業課」が窓口となって各地の産業振興に、改良竈の導入が図られたのではないかと考えられます。

改良竈の事例を報告している各県のうち神奈川県以外の地域には、当時工部省の技官であった三郎が、明治13~15年の間に出張した記録があります。おそらくは、その際に各地域において、三郎から竈の改良について指導があったと考えられます。十分な証拠を提示できませんが、出張の記録がない神奈川県については、^{交詢社}を介した情報の交信があったものと推察しています。そしてその成果が、神奈川県版『築竈論』の『改正竈築造解説書 甲』であると考えられるのです。

このように、『改正竈築造解説書 甲』と『築竈論』とを並べてみると、竈の改良技術という側面における、宇都宮三郎とその周辺の関連が浮かび上がってきます。また、技術の伝播や地域における産業振興など、近代化を見るさまざまな切り口と課題が、この2冊の間からみえてくるような気がします。(天野博之)



『改正竈築造解説書 甲』



『築竈論』

※1 (1834年生、1902年没) 幕末から明治にかけて活躍した化学技術者。セメントや炭酸ソーダの国産化等、日本の近代化に大きく貢献した。詳しくは豊田市郷土資料館特別展図録『舎密から化学技術へ』参照。

※2 福澤諭吉が設立したわが国初の社交団体で、福澤諭吉の親友であった宇都宮三郎も設立からかかわっている。『交詢雑誌』は交詢社の会報。

八柱神社の謎とロマン

5男3女神を祭る神社

■ とよたの八柱神社

愛知県神社名鑑(平成4年)に所収されている神社は、豊田市内に172社あります。そのなかで、一番多いものが神明社で39社、2番目は八幡社で29社、その次に多いのが八柱神社の19社です。

八柱神社の祭神は、あめのおしほみのみこと天忍穗耳命、あめのほひのみこと天穗日命、あまつひこねのみこと天彦根命、いくつひこねのみこと活彦根命、くまのくすびのみこと熊野櫛樟日命、いちしまひめのみこと市島姫命、たぎりひめのみこと田心姫命、たぎつひめのみこと湍津姫命(神名は国附町の八柱神社祭神を表記)の5男3女の8柱です。

5男3女神は、八柱神社のほかにも、神明社や宮口神社、貝津神社にも祭られており、これらを合わせると24社にのぼります。

■ 八王子社から八柱神社へ

5男3女神を祭る神社の分布を見てみると、猿投地区が13社と断然多く、高橋地区4社、拳母地区4社、松平地区2社、上郷地区1社で、高岡地区0社となっています。さらに東加茂郡・西加茂郡まで拡大してみると、三好町2社、藤岡町11社、小原村4社、足助町4社、下山村2社、旭町に1社あり、猿投山を取り巻く形で集中していることがわかります。

これらの八柱神社の由来について明快に記録されたものは今のところ見当たりませんが、神社名鑑に記載された神社の由緒がひとつの手がかりとなります。

これによると、八柱神社を称している神社の多くは、かつては八王子権現あるいは八王子社と呼ばれていたという記載が随所に見られます。そのなかには明治維新以降に改称されたと記されているものもありますが、その理由を明らかにする記述はなく、豊田市域においては神社名鑑に八王子を称する神社は見当たりません。

● 5男3女神を祭る神社

区分	社数	地区名(神社名)
八柱神社(八柱社)	19	長興寺、千足町、森町、市木町、矢並町、大見町、御船町、四郷町、舞木町、乙部町、本徳町、石野町、寺下町、成合町、富田町、国附町、篠原町、八草町、畷部東町
神明社	3	今町、石楠町、王滝町
その他	2	宮口神社、貝津神社



◀八柱神社(国附町)



八柱神社の剣▶
えちぜんやすづく
越前康継作
(家康から徳川葵紋の使用を許された刀匠)

国附町の八柱神社には、元禄14年(1701)に奉納されたつるぎ剣(郷土資料館保管)があり、「奉納 三州賀茂郡国付村 源總乗 八王子権現宮 元禄十四年三月吉日」と記されています。このことから国附の八柱神社は、元禄14年(1701)には八王子権現宮、あるいは八王子社と称されていたであろうと思われます。

■ 八柱神社の謎とロマン

八王子社の祭神については、5男3女神のほかに、ごずてんのう牛頭天王の王子あるいははちおうじのみこと八王子命を祭神とするところもあります。牛頭天王は夏越えの神であり、この地域では津島さんあるいはお天王さんとして、古くから信仰されてきた神さまです。こうしたことから牛頭天王の王子(八王子)が同様に信仰の対象とされたこととも考えられます。

八柱神社の歴史をたどるなかで、八王子社がほぼ一時期に八柱神社へ改称されたことや八柱神社の祭神である5男3女神と八王子神の関係に関しては依然として謎として残りますが、猿投山を拠点とした神とそれを取り巻く神々の存在が垣間見え、古代から続くふるさとのロマンを感じます。(民俗担当 蟹 一夫)

「献上塩鮎」その後

～一年たった塩鮎を食べてみる～

平成14年8月豊田市郷土資料館で、鮎を塩漬けにする作業が行われました。これは、江戸時代に拳母藩内藤家が、徳川幕府に献上していた塩漬け鮎を再現したものです。作り方は内藤家文書「献上塩鮎仕立方之覚」(当館蔵・参照「郷土資料館だより」38号)にもとづいて作られました。

最初の興味は、塩漬け鮎がいったいどんな味がしたのだろうか?という点でした。漬け込みからほぼ1か月後、干物のような塩漬け鮎の調理方法がわからず、とりあえず焼いて食べたところ、カリカリであり美味いとはいえませんでした。ところが、これは調理方法に問題があったのです。この塩漬け鮎に興味を持った矢作川研究所・矢作川漁協の方々が地元の料理人の方と協力し、塩抜きや調理方法を研究された結果、塩漬け鮎の雑炊や焼鮎など、料理の仕方次第で美味しくいただけることがわかりました。

さて、次の興味はこの塩漬け鮎がいつまでもつのだろうか?という点です。そこで、平成14年10月初旬、シーズンも終わりに近づいた鮎を同様に塩漬けにしたものを保存することにしました。



昨シーズンの塩漬け鮎

保存の目安は、次のシーズン(平成15年)の鮎が始める7月です。そして今年7月、塩の中から鮎を取り出し塩抜きのために酒粕に漬けて数日後、鮎を試食しました。鮎は、塩で完全に水分が抜け、軽く火に焙っただけで骨まで食べられました。もちろん臭みもまったくありません。調理方法次第では、いろいろな料理に使えると実感しました。

さて、こうしてみると次のシーズンの新鮮な鮎が採れるまで塩漬け鮎が保存できるわけですから、江戸時代の保存食として塩漬け鮎はとても重宝したのではないかと考えられます。だからこそ、江戸まで運んで献上したのでしょう。(伊藤智子)

青銅鏡製作奮闘記

～企画展「古代のきらめき展」より～

歴史の授業で見た青銅鏡の写真は緑青ろくしょうに覆われて青く、青銅鏡とはそういう青緑色の金属できているのだと思っていました。しかし、それが鏡として伝わっている以上、その下には姿を映す輝きがあったはずで、できた当初の青銅鏡は、どんな風に光ったのでしょうか?その輝きを再現すべく、青銅鏡を作ることにしました。

今回は溶けた金属を型に流し込んで作る鑄造という方法で作りました。昔は土や石などで型を作ったようですが、ここでは鑄造用石膏るつぽで型を取り、使用しました。坩堝つぼに入れた青銅を強力な火力で溶かします。温度は1000～1100度にもなり、近寄るだけで大量に汗が出ます。液状になった青銅を型に流し込みますが、これがなかなかうまくいきません。空気が入ってしまい、型の模様が



うまく反映されません。今回の鑄造で一番難しかったところです。

青銅が冷めたら次は磨きです。大雑把に電気グラインダーで平面に削り、次にやすりを使って磨きます。やすりは目の粗いものから細かいものに順にかえます。最初はでこぼこだった青銅鏡がだんだん平面になり、姿をぼんやりと映すようになってきます。とても目の細かい紙やすりで磨くころにはかなりはっきりと姿が映るようになります。仕上げに金属磨きで磨くと、硬質な輝きを放つ美しい鏡が出来上がりました。

今回は豊田大塚古墳から出土した変形獸文鏡へんけいじゅうもんきょうを再現しました。特別な道具は使わず、小規模に一枚一枚鑄込みましたが、古代の職人が鏡を作る技術の高さに感心しました。原材料の選別や型を作る方法、人力でひたすら磨き上げる労力、どれも考えると気の遠くなるような時間と大勢の人々によってつくりあげられたものなのでしょう。一点の曇りも無く、光り輝く鏡は今も昔も変わらず人を魅了してやみません。(保坂ゆみ子)



鈴木正三遺跡は平成15年6月4日、史跡名勝天然記念物として新しく市の文化財に指定されました。区域は、鈴木正三が修行し、創建した市内山中町恩真寺の境内一帯で、参道や座禅石、本堂、庫裏、墓所、不動滝、岩穴観音、蛇石川上流部と山林の一部で、面積は21,506㎡です。

鈴木正三は則定(現足助町)の武士・鈴木氏のもとに生まれ、関ヶ原の戦いにも参加しましたが、42歳のとき出家しました。

出家した正三は千鳥山(市内千鳥町)から恩真寺の山間地一帯で病にたおれるほどの荒修行に励みます。座禅石、不動滝、岩穴観音などはその修行の場といわれています。

文化財シリーズ



45
鈴木正三遺跡
(市指定文化財)

正三は寛永元年に石平山に庵を結び布教活動をし、同9年(1632)に仏殿をととのえ石平山恩真寺を創建しました。

慶安元年(1648)に正三が江戸にでるまで、恩真寺は正三の活動の拠点でありました。『二人比丘尼』『念仏草紙』をはじめと

した本を著し、妙昌寺(市内王滝町)に梵鐘を寄進し、浄心寺(市内山中町)と医王寺(市内矢並町)の修復・再建や、十王堂・心月院(足助町)などを建立しました。

寛永14年(1637)の島原の乱では、荒廃した天草地方の復興に力を尽くしています。恩真寺を訪れたことのない方は、都市の喧噪を離れて、正三の哲学にふれるよい機会かもしれません。

資料館NEWS

夏休みこども月間開催

8月1日～8月31日まで、「夏休みこども月間～むかしのくらしを体験しよう～」を開催しました。火おこし体験や郷土資料館ポイントラリー、とよたのむかしばなしビデオ上映、金属鑄造実演、まがたま講座、土偶講座、ペーパークラフトワークショップなど、多彩な催しをしました。

ポイントラリーは、郷土資料館にある11か所のポイントをまわり、体験できたらスタンプを押し、全部まわればオリジナルグッズがもらえるしくみです。ポイントは、黒曜石を使って紙を切る、すり石・石ざらを使って大豆をすりつぶす、模造品の青銅鏡をみがいてみる、火おこし器を使う、かつおぶしけずり器などのむかしの道具をさわるなどです。

2度3度来てくださる方も多かったこともあり、

ポイントラリーは664名、まがたま講座は194名、土偶講座は57名、ペーパークラフトワークショップは194名と多くの方にご参加いただきました。



土偶講座のようす

おわびと訂正

「郷土資料館だより」44号にて資料紹介しました鈴木正三の袈裟につき、一部誤りがございました。

本文中、正三の袈裟を糞掃衣であると紹介しましたが、いずれの袈裟も壊色(汚れたような人の欲を廃した色)ではありますが、古財よって作られた袈裟とはいえ糞掃衣の部類には入りません。お詫びして訂正させていただきます。

利用案内

開館時間 9:00～17:00

休館日 毎週月曜日(祝祭日は開館)、年末年始

入場料 無料(ただし特別展開催中は有料となります)

交通 名鉄「梅坪駅」より南へ 徒歩10分

名鉄「豊田市駅」より北へ 徒歩15分

愛知環状鉄道「新豊田駅」より北へ 徒歩17分

■豊田市郷土資料館だより No.45■

平成15年10月14日発行

編集・発行 豊田市郷土資料館

〒471-0079 豊田市陣中町1-21

☎(0565)32-6561 FAX(0565)34-0095

E-mail: rekihaku@city.toyota.aichi.jp

URL: http://www.toyota-rekihaku.com